

菊陽人 りさーち



うちむら あき
内村 安希さん (10歳)
[中代]

- 趣味 石に絵を描くこと
- 将来の夢 漫画家かデザイナー
- 今一番やりたいこと ディズニーランドへ旅行に行きたい!
- 家族へお願いしたいこと 子猫を飼いたい

「菊陽人りさーち」に掲載を希望される方は、はがきに「氏名」「年齢」「住所」「連絡先(昼間)」を明記のうえ〒869-1192菊陽町役場総合政策課「菊陽人りさーち」係までお送りください。
注) 掲載対象は、小学生以上で菊陽町に居住している方に限ります。親子、祖父母と孫など2人1組での掲載もできます。掲載が決まりましたら、こちらよりご連絡させていただきます。



にしもと ありさ
西本 有沙さん (9歳)
[中代]

- 趣味 おにごっこ
- 将来の夢 ケーキ屋さん
- 自分を一言で表すと 元気なところ
- 今一番やりたいこと 北海道に旅行したい

ゆたかな心をはぐくむ 人権のひろば

子どもの目、子どもの声
人権
作文シリーズ
【No.8】

「やめろ」と言えたことを「良かった」と表現する中に、自分への誇りを強く感じます。また、過去の戦争の問題を自分の身近な問題としてとらえ、今の自分の生き方・命を考える機会とする受け止め方に共感させられます。

問い合わせ
人権教育・啓発課
☎232-2113



▲共に学び合う教室

ぼくはこの一年間の話し合いを振り返ってみて、一番変わったことは、いやなことがなくなり仲良くなったことです。仲間はずれの人がいなくなりました。まだまだなことは、男女協力し合うことが少ないことです。僕のこと話し合いはしていないけれど、友達があんなに仲良くなったこと、友達が、自分も、「やめろ」と、いうことができるようになったことが良かったことです。この一年間話し合いがあつてよかったです。

ぼくが変われたこと
菊陽南小学校6年 春田賢志
(現菊陽中学校1年)

「人の痛みがわかる心」これは、作江さんが平和とは何だろう?と考えた時に出た答えです。
作江さんは私達に、本当は思い出したくないという過去の話をしてくださいました。当時十才だった作江さんの父は、満州へ行って首をはねられました。母は、原爆で黒くけになつていて、姉は四本の指で目をかくし、残りの一本の指で耳を押さえたまま黒くけになつてたそうです。兄は兵隊として家を出たまま生きて帰れませんでした。妹は、原爆症とひどい差別によって自殺してしまいました。作江さんも自殺しようとしたけどできなくて、「生きる勇気と死ぬ勇気は同じくらい大きな勇気が必要です。でも、私は、戦争によって殺された家族のためにも生きようと決意した」とおっしゃっていました。私は、作江さんは強い人だと思いました。そして、作江さんが一番はじめに「一人ひとりが何をすればいいのかわかなくて欲しい」と言われたので、きちんと私もクラスのみんなども考えていきたいと思ひました。
平和には、いろんな平和があると思ひます。作江さんの平和は、人の痛み

人の痛みがわかる心
長崎修学旅行
武蔵ヶ丘小学校6年 岡本さくら



▲二度と戦争を起こさない

のわかる心を持つこと。私のガイドをしてくださった方の平和は、花がいっぱい、歌がいっぱいということだそうです。私の平和は、みんなが笑顔で夢を持てるということです。
もつ一つ、ガイドさんから「たった一つの命だからどうしたいですか?」と聞かれました。私は、たった一つの命だから、その命をたのしみたいです。みなさんは、たった一つの命をどうしたいですか?
みなさんの平和って何ですか?
もつ二度と戦争を起こさないように私達の気持ちをつたえていきたいです。

きくよう文芸

菊陽句会報

蔓引けば大方こぼれ零余子かな	坂本百合子	秋の蝶風に押されて低く舞ふ	吉野 早苗
夕月や野点に戻りうつりけり	田中 郁子	さやけしや門辺におはす六地藏	川口 豊子
殉教の島の高みを鶴来る	村田 正三	赤米や縄紋からの農の秋	井上久美子
山の声木の声聞こゆ櫛の実	井 子文	内科医の机上に木の実二つ三つ	日高 妙子
旅の荷にセーター一枚かへけり	財津 早雪	可憐さも優雅さも揺れ秋桜	曾我 育代
妹の忌に菘の色増す黄昏て	原野レイ子	月影と外灯の影長短	曾我トモ子
秋晴れに親子玉入れ笑顔満つ	西村ひとえ	お裾分けする喜びの秋おはぎ	紫藤 祥子
年月児を真似して踊る運動会	力 幸子	降る紅葉輪廻の温み懐に	村上 朋子
立待月鏡にうつる母の貌	寺尾千代子	農を継ぐ姉より届く今年米	合志 重子
酔芙蓉想い出ぎゆつと抱きしめて	高橋 孝子	白ユリの風塵く白さかな	野口 令史
絵手紙の色を重ねて秋本番	堀川 妙子	色褪せし登山帽手に一人言	松橋 強
晴れ渡り流れの音に芒揺れ	佐藤 航	みちのくの古き民家の薄紅葉	佐藤 澄世
栗おこわ二日れんぞく食べている	佐藤 健	無口なる石路に聞く父の聲	三島 一路
ひとにぎり里への土産萩芒	佐藤 節		

短歌会

木犀の香り漂う吾が庭にこぼれし種より赤き花咲く
六畳の畳新たに我が住まい明るくなりてイ草の香る
潮風の香り漂ふ路地裏に干物並べて売る人らあり
穂を垂る稲田は黄金に色づきて刈り入れ準備か人等動けり
若き日は肥後の夕風辛かりき今は設備の整いおりて
あるがまま受入れ生きむと決めし朝見慣れし花の白き眼に沁む

今村 貞子
岡本まさこ
菊川あさみ
下田 久子
皆嶋キクノ
森 敦子